意外な作家養成所

なぜ探検部出身者に作家が多いのか

大野秀樹

高野秀行／角幡唯介 著
▶地図のない場所で眠りたい
4・24刊 四六判296頁 本体1500円
講談社

二十歳で夭折した天才画家・関根正二のヴァーミリオン（朱色）。こもった熱さを表している。この若いときのこもった熱さを持ち続け、具体的に行動し、具体的に本として表現している、十歳離れた早稲田大学探検部出身者の対談集である。二人の第三五回講談社ノンフィクション賞の同時受賞を記念して企画された。年長の高野はデビュー作の『幻獣ムベンベを追え』（集英社文庫）を除くと、達者な語学力を生かして主に人間を対象にした探検を、一方、角幡は出世作の『空白の五マイル――チベット、世界最大のツアンポー峡谷に挑む』（集英社）をはじめ、北極圏など大自然を対象にした探検を主に行ってきた。二人のスタンスはなかなかの自然体で、高野の次の言葉に象徴される。

〈「冒険・探検がいつ好きになって探検部に入ったのか」という聞かれ方をよくされるんだけど、そうじゃなくて、みんな昔は好きだったのにどんどんやめてっちゃって〉。

実は、評者も探検部出身者である。そのため、ガッテン、ガッテンと、まるでかつての仲間の対談集を読んでいるような気分になった。最もガッテンした三点は、（一）探検部のいいところというのは、学生時代になにをやったかというのを卒業してから問わないこと。現役時代、なにもやっていないやつもいるわけ。だからといって分け隔てすることがない。それはすごくいいところ（探検は競争競技ではないからか。さらに加えると、現在の職業、社会的地位も付き合い・評価にまったく関係しない。探検部には横から目線しかないようだ）、（二）多くの部員はなんだか決まりが悪そうな感じで大手企業に就職していき、世間常識的には大手企業就職組が勝ち組なのだが、探検部的には高野、角幡たちが勝ち組で就職組がドロップアウトしたことになってしまっている（このような斜めから目線は存在する）、（三）角幡の旅はすべて自腹である。お金を出してもらうと、（北極圏に衛星電話もGPSも持たずにという）自分のこだわりが変形されてしまうのが怖い（一九八四年の植村直己のマッキンリー遭難も、スポンサーシップと無縁ではないであろう。余談であるが、自腹でフランス取材旅行などを行った池波正太郎と、出版社丸抱えの大名取材旅行を行った山口瞳とは、没後の書店での扱いがまるで違った。没後も売り場の一角を占めた池波に対し、山口の本の多くは潮が引いたように消えてしまった。大名旅行もろもろの反動だといわれている）、である。「かくれんぼの鬼とかれざるまま老いて誰をさがしにくる村祭」（寺山修司）。

二人が文章を書くのは、鬼のまんま大人になってしまい、人生に充足感がないからだ。その充足感を村祭のように探検や冒険に求めているのだ。角幡は、〈僕は文章を書くために探検をやっているところがある〉とまで述べている。高野も同様だ。〈俺自身はやっぱり文章を書かないではいられないんだよね。それは、自分に欠けているものがあるということなんだよ〉。すなわち、探検や冒険は、行って半分、書いて半分なのだ。後半の半分をどうするかというのは、現地でやることに匹敵する大問題なのである。現場＝行き当たりばったり、原稿書き＝緻密で周到という図式である。二人はこれほどまで書くことに執着しており、願いは〈何をしているのかではなく何を書いているのかで評価してほしい〉であり、〈ノンフィクションと小説はジャンルが違うけど、でも、小説よりもおもしろいものを書いてやりたい〉である。

その他にも、早稲田大学探検部は西木正明、船戸与一という二名の直木賞作家を輩出している。特に船戸は、高野、角幡によると、ノンフィクションからフィクションに行って成功した唯一の例らしい。他大学探検部でも、一九五六年にわが国初の探検部を京都大学に創設した本多勝一をはじめ、星野道夫（慶應義塾大学）、高山文彦（法政大学）、吉田敏浩（明治大学）、関野吉晴（一橋大学）、磯貝浩（上智大学）、長倉洋海（同志社大学）、川成洋、新妻昭夫（北海道大学）ら、へたな文芸サークルよりも多くの作家を世に出している。高野は、なぜ探検部に作家が多いのかについて、〈探検部のやっていることはとにかくわけがわからない。それを人に納得させるということを大学時代に一所懸命やっていると、それはプロにつながりやすい〉と推測している。

角幡は、探検というのは基本的に土地の話で、冒険というのは人の物語、と定義している。何でも理屈をつけるのは探検部の習性だが、両者の境界がクリアでないことを承知の上のことだろう。ただ、探検とは人が予想できないことをやる、あるいは主流＝世間の常識とは違った手法やモノの見方で、裏側から世の中の重要な側面を見てやろうという動機を無意識のうちに抱えている、という探検部マインドは、他のさまざまな分野からも共鳴してもらえるのではないだろうか。

（社会医療法人財団大和会常務理事・杏林大学名誉教授）

「反中」「嫌韓」に“傾斜”している人びとに読んでほしい一書

現地に足を運び、自ら見聞きしたことをベースに学ぶ意義を改めて確認

矢野秀喜

李 泳采・恵泉女学園大学東アジアＦＳグループ 編著
▶東アジアのフィールドを歩く
女子大学生がみた日・中・韓のすがお
5・30刊 Ａ５判126頁 本体1600円
梨の木舎

7月10日、「言論NPO」（日本）と「東アジア研究院」（韓国）は、共同実施した日韓関係に関する世論調査の結果を発表した。相手国にマイナスの印象を持つ人の割合は、日本が昨年から約17％伸びて54・4％に急増。韓国も微減したものの70・9％と高止まりしたままであった。その理由としては、日本では「歴史問題などで日本を批判し続けているから」が最多の73・9％、韓国では「韓国を侵略した歴史を反省していない」が76・8％と最も多かった。ただ、悪化する国民感情について、日本人の6割、韓国人の7割が「望ましくない」「改善すべきだ」と回答したという。この世論調査は日韓関係の現状を問うものであったが、日中間についても似たような状況にあることはほぼ間違いないと思われる。日韓、日中とも歴史認識、領土問題等をめぐって相互に反発、葛藤が高まっている。しかし、そのような関係を良しとはしない、互いに必要としあっているから、これがおおかたの認識ではないだろうか。

では、どうしたら良いのか？　この問いかけに一つの回答を示してくれるのが『東アジアのフィールドを歩く』である。本書は、恵泉女学園大学が従来から行ってきたフィールドスタディ（FS）プログラムの中に初めて導入した「東アジア社会コース体験学習」（以下、東アジアFS）に参加した12人の女子大学生の体験記である。彼女たちは、2013年8月末から9月上旬にかけて12日間で福岡－韓国－中国を回り、それぞれの地で歴史、文化などを見聞・学習し、多くの人々と交流した。また、各人の専門、個人テーマについて事前学習するとともに、現地で聞き取り調査等を行った。それらが本書にコンパクトにまとめられている。本書は、12日間の記録（1 わたしたちのフィールドスタディ――日・中・韓をめぐる12日間）、個人報告書（2 それぞれのフィールド――見て、聞いて、考えた）、感想（3 これから――東アジアはわたしたちの未来だ）の3部で構成されているが、いずれの報告も問題意識に満ち、みずみずしい。

彼女たちが歩いたコースの中には、ソウルの西大門刑務所歴史館や北京の中国人民抗日戦争記念館なども組み入れられていた。西大門刑務所歴史館では、「植民地時代、日本警察や特高刑事による拷問の様子やその道具なども展示されている。（中略）日本人として見ていて辛いものがあった」と率直な感想を漏らしつつも、「この歴史館をめぐることで、独立と民主化を成し遂げるために抵抗した韓国社会の歴史的な証拠を見ることができた」と述べている。中国人民抗日戦争記念館でも、「日本人である私たちとしては、資料館に入るには少し勇気が必要であった」が、「日本では体験できない貴重な歴史勉強になった」とまとめている。そして、韓国で、靖国合祀取下げ訴訟を闘っているイ・ヒジャさんとも交流した齊藤こずえは、第3部で、「加害の歴史教育から未来の歴史は変わる」との表題を掲げた感想をまとめ、その中で「日本がどれだけ加害者の部分を後世に伝えていないかを今回の東アジアFSで改めて感じた」と述べている。

ただ、彼女たちは、今回のFSで過去の歴史について学んできただけではない。韓国、中国が直面している諸問題、あるいは日韓、日中間が共同すべき課題等についても見聞きし、その調査結果を報告している。たとえば、間宮美南海は「韓国の非正規雇用の現状と課題」について分析し、そこにおいて女性労働者が正規・非正規の違いとともに性別という二重の苦難の中にいる現状を明らかにした。グローバル化、新自由主義が労働現場、女性労働者に何をもたらしているかを分析し、その矛盾・問題解決に向けての国境を越えた連携・共同の必要性を示唆している。また、浅沼玲奈は中国の水汚染問題、新野華奈は同じく大気汚染問題を取り上げている。これらはいずれも中国の急速な経済発展に伴って現れている問題であり、日本ではともすれば中国の抱える矛盾・問題としてあげつらい、「反中」感情をあおる材料とするような向きも少なくない。しかし、二人はその現状と中国政府の対策について冷静に分析している。新野は、大気汚染対策に関し、日本企業が排煙脱硫技術について最先端の技術を持ちながら、それが中国の中で殆ど採用されていない現状とその原因を分析し、日本企業の努力（技術のカスタマイズ、コストダウン）の必要性、日中協力の展望を指摘しているのである。

これらの報告を読むと、現地に足を運び、自分の目で見、耳で聞き、それをベースに学ぶということの意義が改めて確認できる。そして、それこそが日韓、日中の間の懸案を解決し、より良い未来に向けての共同の在り方、方向性を見出していくための最短の道であることも分かってくる。本書の第3部で、中村桃子は「メディアを通して見たものがすべてであるかのように中国、韓国を見ていたことを恥じた」とさえ述べている。このような感性こそが東アジアの未来をひらいていく。

本書を、「反中」「嫌韓」に“傾斜”している人びと、とりわけ若い世代の人たちに読んでいただきたい。

なお、最後になったが、本書には12人の女子大学生の報告だけでなく、彼女たちの先生である李泳采さんが、短くはあるが、懇切な解説（「キーワード」「エッセイ」）を付されていることを述べておく。

（日韓つながり直しキャンペーン2015事務局長）

「いい」かにする

めた渋沢は、大いなる慧眼を持った人物

田中直隆 著
▶渋沢栄一物語
社会人になる前に一度は触れたい論語と算盤勘定
7・5刊 四六判224頁 本体1500円
三冬社

渋沢栄一（1840～1931）は、明治黎明期における日本資本主義体制の形成に大きな原動力となって活動した人物として知られているが、関わった事業は銀行（Bankを銀行と訳したのが渋沢栄一である）、証券取引所をはじめ、教育、美術、文化関連も含め、実に多岐にわたっていて、興した会社、団体、学校は約六〇〇に及んでいるといわれている。著者は経営学を専攻し、実際に会社を興し経営の実践も行ってきたのだが、学生時代に経営史の講義で渋沢栄一に出会い、『論語』つまり道徳行為を基本にして展開した人だ」ったと著者はいう。だから本書では、『論語』を解読していくとともに、『訓言集』、『論語と算盤』という渋沢の著作を手掛かりにして、渋沢経営哲学の実相へと迫っていくことになる。また、書名に「物語」と付されているが、評伝的な記述をとりながらも、著者の経営上の経験と絡めながら、渋沢の経営哲学の理念といっていい人間論を明らかにしていく。

渋沢が幕末期に、徳川家最待されて、明治新政府の大蔵省の役人となる。やがて、理不尽で「過大な予算を押し付けてくる」大蔵大臣大久保利通との確執で官僚を辞める。渋沢、三十三歳の時だった。

「以後、栄一は二度と官僚になることなく、民間の実業家として大活躍をしていくことになり」、「企業は利潤追求のみを目的とするような私的な視点ではなく、国益を第一に、そして企業経営の基本理念としては論語の教えを基準にしていくという信念のもとに貫き通した事業家としての渋沢栄一の基礎が築かれた」のである。

「メディアを通して見たものがすべてであるかのように中国、韓国を見ていたことを恥じた」とさえ述べている。このような感性こそが東アジアの未来をひらいていく。

本書を、「反中」「嫌韓」に“傾斜”している人びと、とりわけ若い世代の人たちに読んでいただきたい。

なお、最後になったが、本書には12人の女子大学生の報告だけでなく、彼女たちの先生である李泳采さんが、短くはあるが、懇切な解説（「キーワード」「エッセイ」）を付されていることを述べておく。

（日韓つながり直しキャンペーン2015事務局長）

出版のお手伝いをします
小説、俳句、短歌、エッセイ、評論、紀行文、学術論文などジャンルを問いません。自分で自分を文字によって表現しようとして原稿をお持ちの方、書店への配本を含めて、ご相談にのります。
図書新聞出版部
☎03―3234―3471　FAX03―3261―4837
e-mail books@toshoshimbun.com